

非暴力直接行動

No. 127

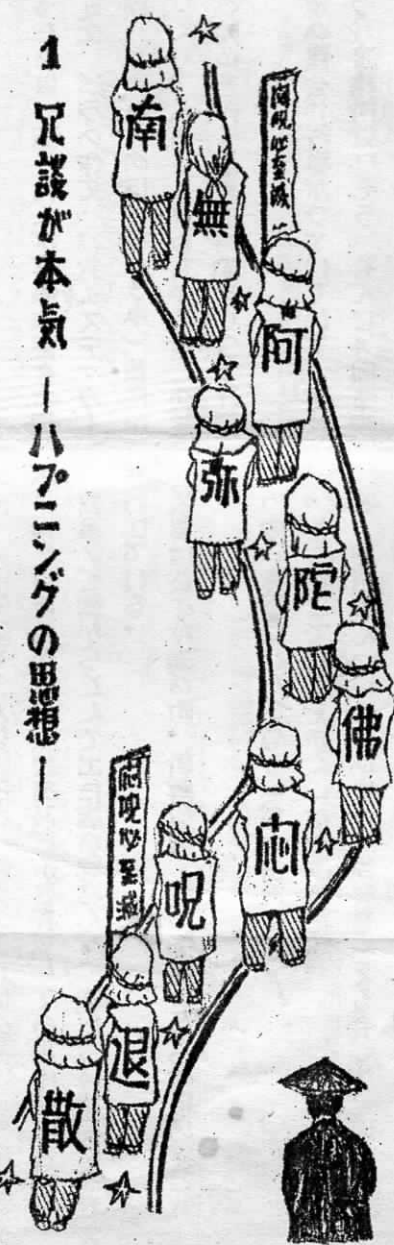
7/30 '82

戦争拒否者インター日本部 大塚町阿倍野西町2-12-2 ウリ大塚町

阿倍野西町念佛行動日録

私たちの、もんじゅヒヤリング闘争...

1 兄談が本気ーハフニングの思想ー



六月二十二日夜、反原発寺子屋講座のかえり、「明輪は、奥電株主総会へ出撃や、その前夜祭」というわけで、打合せがてらちよっぴりビールパイのみにはいった。

「七月二日のもんじゅヒヤリングをおおする。いくとして、どんないき方があるかなあ」

「一万名動員して阻止ゆうてるけど、まあ、やっぱり政治的示威のかけひきみたいなもんやろ。だいたいおじぎは決まってるで...」

「ベロ亭の女連中が助っ人にきて、ゆうてきてるんで、うち、ぜひいかなアカコと思ってるねんけど」

「自分としての主体的なうぎも出東て、現地の助っ人として受け入れられるようなこと、何かでけんやろか」

「ホナ、もんじゅ菩薩さんの絵とお経がいたじらをつくって、道路にしきつめよか。推進派の人や機動隊

war resisters' international

がそれ踏んでいくとき、ちよっとは気がとがめるやう。」

「いっせ、わたしらが、もんじゅ菩薩になって、わたしらの体の上を踏んでいってもらったらええやん」

「それええわ。ねえぶんやろ」

「おもしろ おもしろ」

「それでいい」

「もんじゅでどんな仏さんや」

と、まあいつものことと冗談がすぐ本気になるからおそろしい。



2. それは一週間前からはじまった

さあそれからの一週間というものは、五・六人が準備作業を分担して、「表白文」「文殊菩薩社文」「じらの作文」「おれステッカー」のシルクスクリーンなどの印刷。白地の太のぼり旗(三本)首にかける頭陀袋、自装束(巾組)づくりで(ナント)のちゃんはこの装束の背中に一字ずつ、南無阿弥陀仏をかく墨を五時間すりつづけたの(ダ)一夜ひるなし。

もちろんその間も、毎日予定の集会や行事がつづいていて、それもちやらねばならず、ほんまにウリ事務所は、もう「もんじゅ御争現場」にながら。たとえば、つるがへ行く前日二十九日、ちよっこのにまをみつめて、Mさんはお寺へ心得をききにいき、僧衣・ケサ・珠数・鉦など一式を借りてくるあわたりしだった。

オ一日

3. うしろ姿を拝まれて

六月三十日・AM11時40分、列車でつるが着。駅前からまっすぐ

のびたひろい道路。明るく日差し。ほとんど人影がない。

と、タワシのりばに立っている私服らしいのが、こちらをチラチラ。待合室でも男が、ひろげた新聞のかげからじつとこっちを注目。そこへ別の若い男が近づいて、ヒソヒソ話してる。その内ポケットをふくらませて(いる)ハンドトキー。

まず腹ごしらえと、駅前アーケードを一系列にならんで歩きだす。二メートル間隔で十人ならぶと、二十メートルの長さ。三本のノボリ旗をはためかせ、なむあみだぶを斉唱しての市中デモ行進。何事かと奥からこんで出た店の興さんが、私たちの後姿に手をあわせている。

敦賀はさすが海の町。新鮮な魚・貝・海藻をならべた店が目立つ。

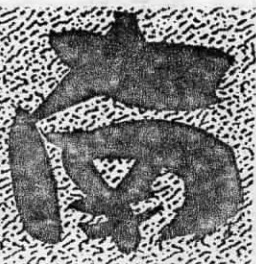
「安い食堂ないかいなァ」なむあみだぶ。

「もうどこでもええやん」なむあみだぶ。

と、中川くん(つるが)の中から原發を考える会いが、はずかしそうな顔でひよこ(こり)。

「けったいな集団や思たら、あんたらか。またえらいかっこやなァ」

そこで駅裏の国鉄職員食堂に連れていってもらう。定食三百円。市内地図をひろげて、「もんじゅ退散なむあみだぶ」デモ巡行の道順を相談する。



動燃支社・新聞社支局・市役所・病院・漁協・ヒヤリング会場・
北陸電力支社・関電・動燃社宅……

4 戒厳令前夜?の町

午後一時一出発。ピラとおれを配りながら、要所要所で立止っての念仏巡行。

歩きだすと、前後四方から二十人ばかりの私服が、遠まきにしてずつついてくる様子。

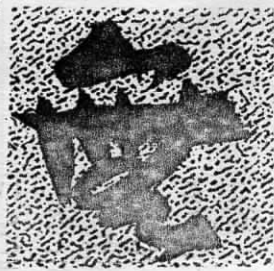
北陸電力支社は、こぼれちりをおそれたが、表玄関をびたりしめきって、裏通門口だけで出入りしている。

「ここが北電です。原稿は持っていないのにウランをしこたま買ひこんで、電気料金をつりあげてます。」

北電が、一日も早く正覚にめざめるようお経をあげましょう。
もんじゅぼさつらいもん

ウインドにうつる自分の勇姿?に思わずニンマリしてしまう。
二階の窓からのぞく社員。

学校がえりの子供たちに出会って、おれステッカーをわたすと、
われもわれもと手が出る。



「もって帰って玄関に貼ってもらいや」

「カバンにはってまえよ」

「ピラ、お母さんに読んでもらうんやで」
名古屋ナニバー、しばらくして大阪ナン
バーの機動隊カマボコ車が四・五台、疾走
していく。さっきからもう何十台……も。

そういえば、町は戒厳令前夜の雰囲気。

福井新聞支局↓敦賀警察署↓商工会議所↓……

最後の動燃の門はしめきられて、ロープが張られ、その前で機
動隊が守っている。

念仏をとなえながら、近づいて横一列にならぶ。

念仏唱名は、十人十色の音声がハモって、ほんとうに音楽的。
そしてふしぎに心が静まる。

セナハ十センチの間隔で機動隊員と向きあっても、なぜか少
しも悪いという気がしない。

「ここが、^{えんじ}庵を建設しようとしている動燃です。文珠の知恵
は、^{えんじ}庵建設を直ちにとりやめよ、と教えておられます。肉服退
散を祈りましょう」

「表白もん……」

近所の人たちが家から出てきて見ている。

機動隊員はバツの悪そう。目のやり場に困ったような顔をし
て、仁王さんのように立っている。

社員が何人も出てきて、しきりに写真を撮る。

ケイサツの車が、ゲートのバリケード一部をあげさせて入って
いく。

静かな街通りに、いま念仏の声だけがひびきわたる。

明日は徹夜だからと、六時に行動終了。

二人は敦賀宿泊。他は武生のベロ亭(敦賀から約一時間、焼き
ものなどをやっている女ばかりのコミュニティ)へー。

▼本紙継続して、希望のときは、ぬり手紙付(半金は加月)自己宛宛入の封筒(半金はワッパ)をお送り下さい。



宿屋のおばさん、編笠の文字をみて曰く
「ケイサツが、変なもんを泊めるないう
て、まわってきてたよ。」

うちらは、もんじゅには反対やさけ、そ
んな人來とちんゆうたけど……
つれのんら、泊るとこあったんかねどす
ると、一軒目、断わられたんは、そのせいや、だんやろか?!

カニ日

5. 小学生は外出禁止令

七月一日、敦賀駅前、正午。

広いコンクリートの道路に太陽が照りつけ、まぶしい。

まるでガラスンとした商店街は、時計がとまっていたよう。

大阪ナンバーのカマボコ車が二台、向うの通りをよこぎる。

あらだに後続組二人が加わって、今日のデモ隊は十一人。列がい

くら長くなって、のぼり旗がふえても、私は自由気ままに、ど

こでも通っておかまいなし。

厳戒体制の中、無届デモを何ともいわぬのは「なれあみだ」とい

白装束」のご利益だ。

「きょうは、もう一度動燃、つぎに労基署・漁協、それからヒヤ

リング会場の下見にいこう」

「東通りの町並を一軒一軒内付けて、じろとおれを渡そう」

まだ昼をすぎたばかりなのに、小学生が先生の引率で帰っていく。

かまぼこ車で封鎖された路地のすきまをあけてもらって、住人の

母親が、子どもの手をひいて帰っていく。

小学生は、外出禁止命令が出ているとうな。

6. 偵察！ヒヤリング会場

ひやに通りのあちこちに機動隊員が配置されてるなあ、と思っ
たら、すぐもうヒヤリング会場だった。

通行止めの路地という路地には機動隊員が立ちはり、要路
にはバリケードや、横にしたかまぼこ車がおかれて、虫一匹はい
るすきまもなさそうた。

二方がひろい道路に面した会場建物の外側は、高いフェンスで
囲われ、窓も玄關も板がこいで、どこが入口なのかわからない。

NHKが、むかひの四階建のビルの一階つえを借切って陣ど
ている。

きつと、あの前あたりでなにかがおこるんやろ。

だが、報道陣とケイサツの他には誰も見あたらない。

「ここが会場です。こんな異常な警備をみただけでも、一方的

なまやかしたヒヤリングであることは、誰の目にもあきらかです。

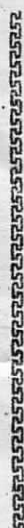
ここに入っていく人が、文殊の知恵に目ざめるよう、さあ念仏を

となえましょう」

「もんじゅばさつらいもーん」

フェンスの中をがためる機動隊員の数がワックとふえる。

機動隊の方の準備は、すでに万全のようだ。



7. 前段集会・津内公園

午後五時三十分・津内公園で、ヒヤリング阻止前段集会。そのあと市一團デモ。

ベロ草の女たち四人とここで合流。放射能を掃き出すホーキをもった魔法使い・原子の火よりマツチの火をどうぞのマツチ売りの少女。マンガラのじエロ。旅芸人の遊女。全身に「なむあみだぶ」のお札が貼ってある。

これが目立たないでおれようか、という奇妙キテレツなかつこう。彼女らの加勢で、白装束のおかげで本来のケイハクさが出にくかった私にも勇氣百倍。むかしから念仏者とハンパモンとは、いっしょに歩いて内付けした仲だ。

四月、不払い連講座で話をしてもらった中島哲演さんに会う。ほんもののお坊さんが、私をみて、なんて云わはるか気になっていたのだが、「あなたの方の方にこそ、ほんとうの仏のところがあつて、それとゆうてくれはった。

入口あたりが何かもめている。中核派部隊へ五十人位？が来たのを、機動隊が阻止してらしい。斗争本部は全く知らん顔。そのうち中核が参加をあきらめたのか、徹夜という一幕。

赤いハチマキが配布される。これをつけないと、参加者としての安全を保証しないという本部の話。これは誰でも参加できるデモだと思つて、私たちはハチマキをあえて辞退した。

六時すぎ、デモ出発。周辺の労働者を中心に、千数百人の隊列だ。その最後尾に私たちがつく。

再び津内公園へ私たちが戻ってくる。先着デモ隊の人たちが一斉に拍手で迎えてくれた。ちよつとテレル。(中核派と私たちのあまりのちがいはー)

8. ライトに歩き出す白い一団

午後八時・夕食。フロ。小憩。仮眠。

午後十時三十分。今夜の一万八結集地点、松原浜グラウンドへ。ニキロあまりの、くらい空あかりの夜の町並。のぼり旗をはためかせた白い一団が、念仏を斉唱しながら進んでいく。何やら戦国時代の出陣の気分。

と、次から次と、ぞくぞくバスの一団がわたしらをおいこしていく。

全国各地からの仲間達だ。ライトに歩き出した白い一団にびく。窓をあけて手をふる人。その手にステッカーをわたす。

松原の中へはいっていく路上には、バスがもう三・四十台も進入を待っていて、さすが一万人動員のかんじ。

会場は、もう人と旗でいっぱいだ。なにしろまっくらでよく判らないが、ひろさは扇町公園ぐらいかな。

マイクの音が、遠く夜空までよくひびいてくる。

午後十一時半。集会がはじまる。

知ってる顔は……と、釜田芳、若ひまわりの会、名古屋きのこの会……市民グループは三百人ぐらい。

疎

おしらせ 8月7日(金)PM1:55 市立労働会館(森の宮)へ、不審者同・所持物の検査のとき、あなたはどうしますか？ 迎へ

一列にびたりと肩をくっつけて、横に坐りこむ。
海からの夜風で、かなり冷えこんできた。

オ三日

9 先発隊配置へ

午前二時・先発後発の二部隊にわかれて、いよいよヒヤリング会場包囲のために出発。

私は、先発組の11梯団(西日本の市民グループ)に所属。指揮は中島哲彌さんと佐伯さんへめだかの学校だ。

前をみると、もうずっと先の、暗闇のみなたまで、延々と二毛隊なのだ。

しらすいらずに頼がはるんで、踊りだしたいくらい。

これだけいれば、阻止だってなんだ。だって出来るような気分だ。

x

x

x

午前二時半・機動隊に迎えられるようなかたちで会場につく。

全体のどのへんの位置にいるのか見当がつかない。NHKの車がかなりむこうにみえるので、正面からみて、右側面のいすばんはずれのようだ。



チヨット劇画調

いびるふたつ、の対決



隊列が会場フェンスからずっと離れた道路の端に定置したので、私たちはそのままの足で道路の真中へ出る。一列機動隊機動隊と対峙して立つ。

「文殊菩薩(もんじゅぼさつ)いもーん」

うすらあかりの中にひときほは目立つ背

に負った一人一文字の南無阿弥陀仏の音。

夜空にひびく「表白文」の音。

やがて離れていった部隊が次々にフェンス前に移動してきて、そこに坐りこんで待機。

決

10 中核派がやられてるぞォー

午前三時・待機したまま何事もない。

と、さっき私に通って下ってきた薩摩の降リ口あたり、しきりに投光器が光り、夜陰五百メートルほどの遠くから、槍や棒が交錯する二ブイ音が聞こえてきた。

「おーい、中核派が機動隊にやられてるぞ」とさげびながら、10人くらいがかけていく。

「ええッ。うちらも助けにいこ」お、ちよこちよいの私は、もう走りだしている。

みんなで四・五十メートルも走ったところで、

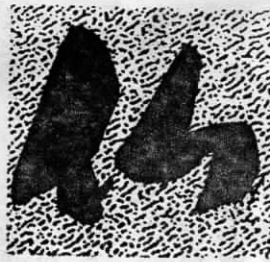
「オーイ、哲瀬さんがいかないでくれ、ゆうてる。ちよ、と待てー」と向井さんが追いかけてくるではないか。

いっしゅん止ったけど、「なんでいったらアカンねん、機動隊にボカスカやられてるのには、とくんか」

「私はいくでエー」

と、かまわず走りだした。向井さんは、哲瀬さんとの関係もあるし、

「ここは向井さんは向井さんで、やめとけいのが役目や。私らは、私らの思いでいったらええ、と「非暴力トレーニング」での指揮者の役割」をこっけに思い出して判断したのだった。



助けにいくなんでいっただけど、そんなことできるもんやない。せいせい野次馬にな

X	X	X
---	---	---

って、中核がやられるのをただ見守っているよりしょうがない。前方正面を真横にズラリ、(キ)の槍が道をさえぎっている。(キ)の広報車からの照明で、槍だけが不気味に光って見える。まぶしくて、(キ)のむこう側がよくみえない。

わたしが近づいていくと、左横手から(キ)がドタドタとあらわれて、わたしたちをばさみうちにする気だ。

目がなれて、まわりをみわたすと、道路を真横にピッタリと所(キ)のそのむこうに、四角く、槍の箱が Outcome ている。その真中から中核の旗だけがつき出ている。完全なサンドイッチにされていて、身動きもできないのだ。

(こちらからは、彼らの頭さえみえない。

二十人ばかりで、口々に「かえれ」のシュプレヒコールをくりかえすが、ビュともするもんじゃない。

私も、「ねえ、ちよ」と、あけてちようだい。ここは人間が通る道路でしょう」といって、タテに手をかけておいてみるのだが、アカン。

どないしよう。夜空を見あげて、うしろをふりかえろ。と、ヤヤッ、暗闇の中を白い一列が、のぼりをひるがえし、念仏の声を美しくひびかせながら、いま、こっちへと進んでくるではないか。

「わあ、援軍」そのときこの頼もしくうれしかったこと。もちろんベロ亭の女たちもいっしょ。

(あとの話では、おちよこちよいの三人をぼっとくわけにいかん。哲瀬さんとは、意見がちがってもしかたがない、と隊列を

（この前より）未だ観客はほとんどが立ちっぱなしで、陣地対決のエキサイティングな様子、くんできてくれたのだ。）

11 嗚呼！ あかつきの対決？

まっすぐ進んできた隊列は、とつぜん、道いっばいにひろがって、横一列に散開。機動隊に真正面から向いあうか、こうになった。ひとときは大きく

「もんじゅたいさーん」

「なむあみだー」

その「なむあみだ」唱名の一回ごとに、誰が先導するもなく、一せいに一歩ずつ、隊列の足が前へ踏み出していく。

（キ）この距離約15メートル。

そして、また一歩。

なむあみだをとどろかすたびに、腹の底から勇氣がわいてくるようだ。

わずか十数人一人一人の小さな念仏が、いま私には天にのびるき、地からわきでる大音のようにきこえる。

何も頭にうかばない。ひたすら念仏をとなえながら、このまま進



かめた集り。前住民はあつきの対決が主権。どきどきとせびみつづけるだけ。

あと二歩。もういよいよ正面衝突！

とたん、両手をひろげて向井さんがとび出すと、その向に立ちは

だった。

「機動隊を真正面にみすえて、ひろい路上の白い一列が、一歩一歩距離をちぎめていくさまは、そりやもう映画がなんかのシーンみたいだった」

「H子さんの一・ポロリポロリ大粒の涙を流したまま迫っていくしずかな横顔が、この世のものと思われぬほど美しかった。」というのは、その時、横でみていた下君、Mさんのはなし。

—あとで、この時のことを話したたら、「おし、こちびりそうやった」とか、「子どもが待ってる。ど、かで止まらなくちゃ」とか、「みんなが進むんやったら、もう覚悟せなしゃあないわ」とか、「あの白い線のとこまでいこう」とか、それぞれみんな夢中だった。

12

あつきの道なき道へ

さて、どないするー

向井さんと話していた哲演さんが、本部へと走っていった。

機動隊が、楯でふさいだ道路の左スキ間から数千人出てくる。

私たちを楯からも制圧する態勢だ。楯のうしろにも列がふえてきている。中核派の姿は全くみえない。

はじめ背後から、「かえれ」「かえれ」と叫んで(いた二、三十人は道の右側にたまって、声もとぎれがち。

こうなったら、もう、このまゝ坐りこもうかー

念仏の声だけが、いっそう大きくひびく。

三分、五分、八分。

と、ヘッドライトが背中をてらして、車の止る音。

「11梯団の人！ 指示に従って、すぐ立のいて下さい」

「エッ？！ 一体ナンのコト？」

斗争本部の車からタスキをかけた人が出てきてマイクで叫ぶ。

「道路を封鎖している機動隊の責任者！ 私は国会議員の××です。この道路は、開けることに話がついている。すぐ道路封鎖はやめなさい」

何でもくりかえす。さ、ぱり(キ)の楯はうごかない。



が、しばらくすると、急に向うの方でボコボコッと音がした。と思ったら、あっという間に、中核派のサンドイッチは、そのまゝ、横の方へつれていかれてしまったらしい。

なんやつにおちん。どないな、たんや。

と思うまに、楯のうしろの(キ)がみるみる減り、ついで、楯の列がうしろ施回していく。

私たちの「なむあみだ」に重なって、「かえれ」「かえれ」の(いせ)よい声が再びあこる中で、あ、という間に道が開いて、それで、一巻のおわり。

13 待機…立って坐つて、ちよつと動いて…

もとの場所に、私たちが戻ったあと、11梯団は、哲演さんの発議で、このことをめぐって路上討論会。こういうことがすぐできたというのはよかった。

が、その途中で伝令が入った。

「いま車できた陳述人を阻止しようと、先頭部隊が(キ)ともみあっています」

いつのまにか、まわりは明るく白んで、人々の顔がよくみえる。どこか遠くでさわがしい声。

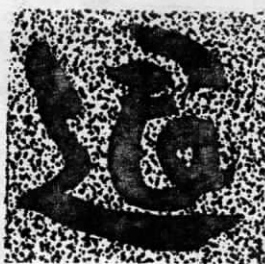
「11梯団は立上って下さい」

角を曲って三メートルほど横へうごいた。と思ったら、すぐとまる。

その先は、会場通用門のようなところで、出入りをさえぎるバリケードにカマボコ車が横づけになっている。

その端が、ひと一人がやっと通れるほどあけてあって、機動隊員が楯でふさいでいる。





そこをとり囲んで、十分ほどやりとりしている。また司令がかうって、もとの地点へあともどり。

「こっちの道からも入ってくるかもしれない。しっかりとガードをかためて下さい」

見れば、ずうっと見通せる。線道路の、六・七百米メートル先に、パトカーが五台ぐらいてまっている。人影はない。

「ほんまに、こっちから来るやろか」

そのうち、だんだん坐りこんで、また待機の姿勢。

それっきり音沙汰がない。

さっきの通用口あたりでは、さわがしい声。見にいこか、と思うが、さっきのいまやし、隊列をはなれにくい。

と、Xの連中が広い道いっばいにジグザグをはじめ。それにつられて十数組のグループも。

運動会のまるで騎馬合戦みたい。見ていると活気づいてくる。

こっちも、まけじといつもの、エッジナイカ、調でおどります。

「よおし、こっちは一人もおさんぞ」とばかり、腹がワクワクしてくる。

来る前に冗談半話していたとおるんなら、私らの体をふんでいってもらおうという場面が来いとおるかもしれない！

Aちゃんが、「私は、阻止なんてよおせん。いつも大阪でやっているようなやり方で、何ができれば、いう軽い気持ちで来たけど、こんな状況の中にあると、やっぱり身体はって阻止しようという鬼に、

だんだんなるナァ」というたけど、それはホンマや。

排除されても排除されても、ねころんだるぞ」という気になってくる。

14 いったい

どうなってるんや



午前五時すぎになった。もうすっかり明るい朝。

わが川様団は、たゞ坐って、ずうっと待機してるだけ。全体の状況がさっぱり判らない。

これでええんかしら、と立ったり坐ったり、だいぶイライラ。と、人民新聞記者が、哲瀬さんのそばによってきて、しゃがみ込んで話しかけている。

「もう、うらちから入ってますよ……」

ええッ、なんでそんなこと。こんなにたくさんの人でとりかこんでんの、三百人もの人が入ってくるのがわからへんて、バカな……やっぱり、そうや。四角い建物の二辺だけに配置してるだけやもん。それ以外の二辺の小路から、なんぼでもはいれるわ。なんで、そこへも配置せえへんのか、ふしぎに思ってたのに……

もう腹が立って、アホらしなって、タマサしたような感じで、一ぺんに気が抜けてしもた。

同じ負けるにしても、困って負けるんやったら、よおし、この次は、という気持ちでてくる。――何もせんでおしまいなんて、――まるでバーカみたい。

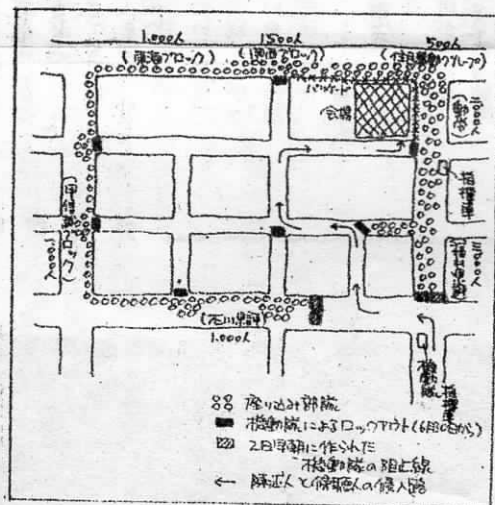
(二)で、その面の経緯を報道してゐる人民新聞(7月5日49号)と、労働情報(7月15日121号)の記事(抄出)で、補つておく

1. The first part of the document is a list of names and titles, including "The Hon. Mr. Justice" and "The Hon. Mr. Justice".

早晩五時頃、機動隊が動き出した。多数出動していたカマボコ車で、南側の大通りの一端と東側の大通りの一端を封鎖してしまい、全くピケの張られていない空白区が作られた。驚いたことに機動隊のこの動きに對し、ピケ隊の側が全く対応しなかった。当日の指揮にあつた総評国民運動部長は車の上から眺めているだけで、機動隊の動きに氣づいて移動しようとした首都圏の部隊を逆に制止するしまつ。

五時十五分頃、案の定、この空白区に二台の中型觀光バスが滑り込んだ。塙か

ら七十人ほどの人々が降り立ち、機動隊員に守られながら狭い路地の中へ走り込んで行く。続いて五時半頃には大型観光バスが一台到着。今度は五十人ほど、ほとんどが学生風、彼らは「動員部隊」。更に六時頃、マイクロバス一台到着。ポデイに「山田工務店」と書かれてあり、なから労働者風の人達二十人ほどが降り立つ（下段の写真）。これも下請業者の「動員部隊」。学生と下請労働者まで動員し、合計百四十人ほど集めて、とにかく形の上だけで公開ヒアリングは強行された。



この間約一時間、座り込んでいる人達には全く何の状況説明もされない。陳述人・傍聴人が入構したこと人を誰も知らず、ただ座り込みだけを続けさせられた。口づてで知らされた首都圏と大阪の部隊が機動隊の阻止線に何度も体当りを繰り返した力が不足で破れない。指揮者は「統制に従い、近くの人々が指揮に従うなさい」とマイクでがなりたてる。

七時頃、指揮者から初め「指令」が出た。「傍聴人と陳述人が入構してしまつたため、只今から抗議行動に移り会場周辺をデモします」。ここで反乱がおきた。首都圏と大阪の部隊を中心に、腹を立てた五百人近くの人々が指揮に従うこ

とを拒否し、会場正面に座り込んで集会を初めた。次々と前に立った発言者は、口々に指揮者をなじり、他の労働者に座り込みを続ける様子を呼びかける。この呼びかけを受けて、自分の部隊から離脱する者がある。部隊の責任者がひきとめようとするが、「彼らの言っていることが正しいではないか」とくっつかかり、制止をふりきる。あるいは別の部隊では責任者に詰め寄り、「何故のんべんだらりと座りこませたんだ」となぐりつける者も。

敵のまやかしヒアリング（まやかしはお前の方だ）が明きらかになった。きょうの闘いを教訓に（何を教訓にするんだ。座ることを教えてもらいに来たんじゃないぞ）、これからガンバロウ。（大河合）

午前五時すぎ青年部の座り込んでいる路地の南側道路から陳述人が封鎖地域内に入ったとの報告。電通青年部を中心にこの路地の阻止線を突破せんとカマボコのスキ間を埋めていくマイクロバスをけん命に押し返す。機動隊の一人がマイクロのうえから写真をとる。これを組合旗で防衛しつつ、攻防戦を繰り広げる。この時、南側阻止線に近づいていた動労部隊の半数が反転し、この路地に突込んだ。政治的になれていない福井の労働者はあつた整然とした力強いメット部隊が全力でぶつかってくるものと考え、攻防戦を一時中止し、後ろにひいて、動労部隊を拍手で迎えた。しかし、一堂の期待通りにはいかなかった。動労部隊はカマボコの前で足を止め、シュプレヒコールを繰り返す示威行動が中心だった。路地に入ってきた動労部隊と入れ変えに後ろに下がった県評青年部の部隊は道路でデモを繰り広げている残り半分の動労部隊に合流し、南側道路の機動隊の阻止線を突破すべく、ジグザグで機動隊にぶつかっていった。しかし、数回繰り返しているうちに、若干のぶつかり合いの後、動労部隊は道路にひいてしまった。青年部約七〇名たらずの部隊は全くの裸になり、機動隊の前になげ出された形にな

った。この時、阻止線のカマボコのむこう側では石川の部隊を中心に機動隊との攻防戦をくり広げていた。結果論となるが、このとき、合同で阻止線を突破し、石川県評労働者部隊と合流できていれば、まだ封鎖地域内にいる陳述人を発見、包囲できていたかも知れなかったのだ。

こうした中で、会場北側にいた東京、大阪の部隊が、所在なしげに寝ころがっている人たちや青年部の闘いをただ傍観している側にまわった動労部隊の間を、百姓一揆がかけぬけるようにして、福井県評青年労働者の闘いに合流すべく隊列を組んで突進してきた。福井、大阪、東京の青年労働者中心の三部隊が合流し、横二〇mに広がった部隊はともに機動隊にぶつかり、阻止線を崩さんと攻防戦を繰り返す。その激しさに、機動隊はあわてて、カマボコ三台を、後方に横づけする。この時、本部車がさかんに突込んでくる。現場に指揮を出すのかと思いきや、攻防戦をくりひろげる部隊に對し、こともあろうに、「暴力は止めなさい、本部指揮に従いなさい」との恫喝を繰り返した。機動隊の盾の水平撃ちで負傷者を出しながらも闘い抜いている部隊に對して、「暴力は止めなさい」とは一体、どちらに向いている発言か。本部方針を越

労働情報



「もんじゅ」ヒアリング阻止に7000人

えて、というより、本部方針がない状況の中で、阻止に向けて闘っている部隊に對するこうした発言は日和見以上の反動的姿勢であり絶対許されるはずがない。機動隊との攻防を一たんひいた三部隊は正面後方に下がり、座り込み合同集会を、他の各団体が中止するなかで、堂々開催した。

七時開場、封鎖地域内にいた陳述人は……

(以下略)

15 とは思ふけど、しかしやっぱし

ところで「陳述人らは、もうはいってしまっている——」と伝わったとたん、なんか、急に、みんなの動きがはでになってきた。小グループにわかれて、路上のあちこちでもこっちでも、独自のジグザグデモがはじまる。

烈しく笛の音が交錯するなかで、「我々は徹夜斗争を貫徹し……」なんて集会する部隊もある。

「みんなのこんなエネルギーを、斗争本部はなんで入場阻止に使わなかったんや。」

昨夜の断固たる決意をもって、今より実力阻止斗争に出撃しますというたんは、口先きだけや。たんか……

「たゞ坐り込んで待機させただけで、出撃とか、阻止線突破の指令は一ぺんも出せへんかったやないか」

「最初から、まあほどほどにしろ、というのが方針やったことが思われへん」

私らは、朝日がさしてきた路上に坐ったり、ねころんだりして、なんかもうアホらしな、て、立上る気がおこらへん。

X

X

X

しかし、考えてみたら、私らにしてもホンマに阻止するいうつもりがあつたんやろか。阻止するためにはどんな作戦をたてて、どんな準備が要って、どんな心構えをしとけばいいのか。なんてことはぜんぶ斗争本部まかせや。

阻止というのは単なるあなたまかせの願望で、本気やなか、たんや

——ということではないか。

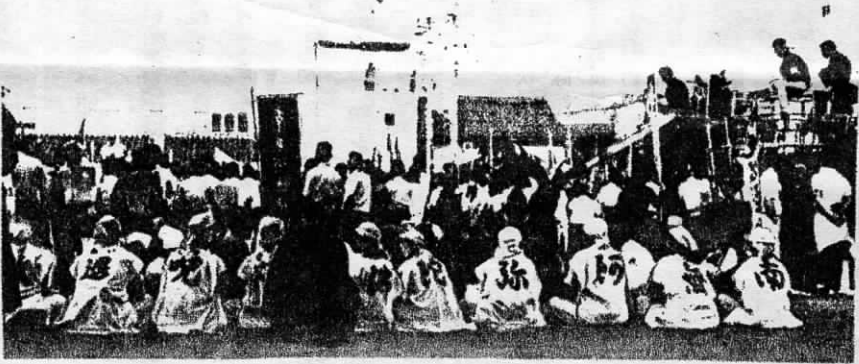
そして現地へきて、にくさん仲間にまじって、氣勢をあげて、そんな雰囲気と状況のなかで、だんだん「よおし」という気になった、というだけの話。

とすると、斗争本部にしても、一万人動員ゆうても、そのうちホンマに阻止する気のもの何人いるか——と考えたら、やっぱり、その大多数の人たちに見合った方針を出すということになるんやろ。

その上、万一、逮捕者がたくさんでたら、一人百万円として五十人で五千万円いる。組合がつぶれる、といったことまでも心配するワケやろ。

本部のやる気のなさに腹立てるのは、自分らでどうやって阻止するか具体的な用意のなさをもそのままにして、ただ責任を転嫁するだけのことやないか……

……とは思ふけど、しかし、やっぱし……



8月20日附6通つゆきさ、「私達の運動が本になった」闘争費拒否のハンドブックを手にし、主催者の指示を拒否する会大盛かん。

▲高嶺・記念切手・口鉄切手の使用席のものをコレクションしています。これをあつめた記念の印章も切抜いてまわってまわっています。

午前七時すぎ、「阻止を抗議に切りかえて、会場周辺一帯デモにうつる」という本部の発表に、なんとなく立上り、動き出す。

威勢のよいグループは、欲求不満をぶつけるように、(キ)のバリケードのところへくると、ジグザグ。カマボコ車の胴体を横竿でたたく、けとはしていく。

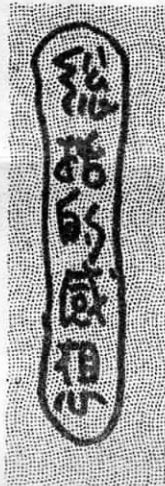
が、(キ)はうしろに下っついてほとんど手を出さない。

|||||

午前八時半。はやくもヒマリングは無事終了らしい。会場から、傍聴人がフェンス内へ出てくるのをみながら、帰還のデモ行列がうごき出す。まさに龍頭蛇尾！

ああ、もくじゅ公開ヒマリング阻止、やつぱりアカンかったなあア……。

(ふうとこら)



不払い連横断入おさままつくらく40号にも、八日曜へとへん人の影がのつてます。送共(20)を参照



▼もう一ヶ月ちかく経つたいま、ふりかえつてみると、参加者七、八千人分の一の教以上を出しなかつた17月2日のあのヒマリング会場前での、阻止闘争は、なんとなく影がつすい。教唆行きて三日間の、私らにとつての一番の印象は、やつぱし、2日早晩の、田の橋の列へと一歩一歩迫つていった緊張感。それと、教唆市申を三日間、念仏を唱えながら、自在に行進したことでの体験という。もつぱら個人的なことになる。

▼が、それはまあ後まわしにして、まづさうしたら、今回のヒマリング阻止斗争は、私らひとりびとりに、「阻止斗争とは一体何やうか」今後も行われることしたら、それは、どんなふうによつてはならないか」を改めて考えさせるものだった。

▼あのような、やつぱし……という結末になつたことについて、多くの人たちは、現地闘争本部の、日和見主義、あるいは恵切りをなう。たとえば、真剣に阻止を闘おうとした部分のエネルギーをすくいあげ、すくなくともそれをバックアップするなどの、時金に商した指令を出したならば、などと、事実、労働情報」記事を見ると、私らは全く知らなかつたが、青年部労働者部隊など機動隊へ突込んでいつてる。(これをもし知ら

されていたら、すくなくとも私らはねこうんぐでいることなど、絶対になかったやろ。それをあべこべに制止するなんてー。

▼あの状況の中で本部が適切でとつと戦術的指揮をとることで阻止はできたやろか。ひょっとしたらできた。できなくとも開催を数時間おくらせる位のことではなかったかも。

▼しかしそれも、徹夜につづく朝食めきで路上に日曝し。おひるまでの勝負で、ヒヤリングは午後三時開催だんて変更されてしまつと、こちらの戦力はもたない。一方、タイホ者受傷者も相当出ずにはすまへんやろ。

▼もちろん、いまの本部の体質として動員の態勢と二般的な質を失えれば、前記のことでも夢物語りや。つまり、はじめから「阻止」はできない。たゞ、あのような意思を形にのこしてヒヤリングそのものの形式の形骸化をうき出させることが、出てきたーといえる。(それは政治的效果といえても、阻止とは関係ない)

▼動員の質が今のままで、七八千人のなかから、千人の戦闘員を志願、選出することはできる。それを攻撃又はゲリラ隊として、状況に応じて出動、戦術部分に投入する態勢をつくり、さらに五百人で、数日前より警察監視網を配置する。(勿論交替制)当日の会場を参加者全員には、すくなくとも会場付近詳細地図を配布し、重案。さ、直前に周知せしめる。様子を50人以下の単位の部隊にわけ、指揮者の相互連絡のもとに、状況に応じて臨機応変の動きをとる(ゲリラ的)自主性を認める。ーといったことが具体化



できるなら、すくなくとも、次のヒヤリングは「阻止」ができるやろへし。しかしそれは、警察闘争が、ある意味で三里隊以上のものへと進み出るといふことや

▼作戦を立てるうえで、人民新聞の「現場配見取図」は大へん示唆的や。会場を四部隊は、F、E、D、C、無抵抗、引退が来るまで受持する場所をじつとねこうんぐでいるだけであえ。遊撃部隊が来るまで持ちこたえて、その遊撃部隊もまた、たゞねこうんぐの戦術方法なんや。

▼その結果が創り出す、あまゝいは出てくる「新しい状況」が、「三里隊以上の」と関連するのは去うまでもない。

▼さて、私たちの白装束は、予想に十倍する効果的なデモンストラーションやつた。とくに夜間はなさうのこと。それと背中一字づつ、黒装束大書した南、高松山岡崎道教は、列のつくり方うごきかたで自在に変幻する大フラガードだつたり、横断幕、いわば全体が大動する大看板。私ら自身がびつくりするぐらい、目下

(背中なりでついでその忘れがた、それでいつも遠方からの視界に入るよう、前後左右の間隔や歩き方に注意した。)

▼の四り旗の合図での、パレードのような行進、曲れ右、横一列への展開(ラッセマ)念仏と唱文のかけ合い、斉唱、合唱、復唱、など、充分やれなかつたが、技術的？なやり方もいっぱい出てきた。

